

新任福祉・介護施設等職員 合同交流・研修会

春

日程

平成31年
4月17日(水)

会場：横浜市開港記念会館

新任職員が学び始めの心構えを整え、同期の仲間と共に、自らの仕事に自信と誇りをもって働き続けることができるように、本県で仕事を始める歓迎の意を表すことを目的に開催しました

1 開会式典

【挨拶】神奈川県
神奈川県社会福祉協議会
かながわ福祉人材研修センター

2 記念講演

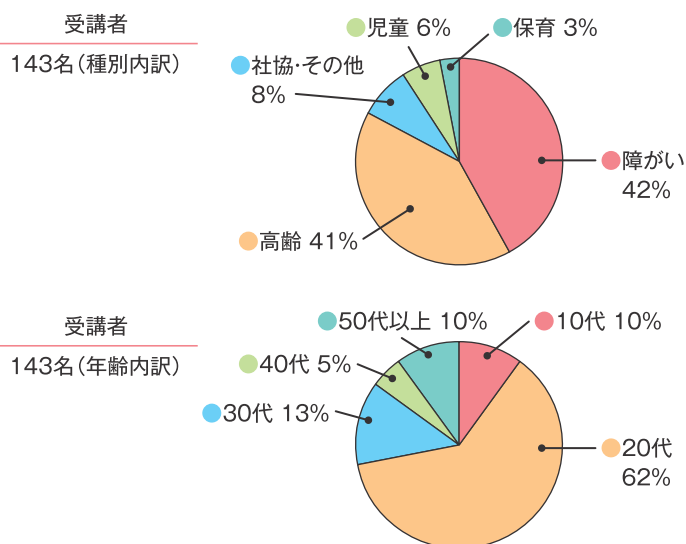
阿部 志郎氏 (社会福祉法人横須賀基督教社会館)

3 先輩職員からの応援メッセージ

【高 齢】社会福祉法人泉正会
スプリングガーデン瀬谷 佐藤 愛莉紗さん
【障がい】社会福祉法人なごみ福祉会
多摩川あゆ工房 長谷川 麻希さん
【子ども】社会福祉法人白十字会林間学校
児童養護施設白十字会林間学校
飯島 あゆみさん、川島 知英さん

4 新任職員から初心の志メッセージ

社会福祉法人泉正会 スプリングガーデン瀬谷
社会福祉法人愛慈会 岡田保育園



先輩職員からの応援メッセージと新任職員からの初心の志メッセージ

「先輩職員からの応援メッセージ」では、4名の先輩から新任職員に向けたメッセージをもらいました。1年目の経験から気づいたことや仕事をしていくうえで大事にしてほしいことを福祉の仕事をする仲間としてエールを送りました。

「新任職員からの初心の志メッセージ」では、2名の新任職員の方から、記念講演や先輩職員からのメッセージを受けて、これから福祉の仕事をしていく上でのご自身の志を伝えていただきました。

先輩職員からのメッセージ

間違えてもいい。先輩にアドバイスをもらって。

入職1年目は利用者の方とのコミュニケーションの取り方や介護・支援の方法に自信が持てず、悩みや不安を抱えるものです。でも、入職して間もないころは、先輩職員から仕事を教えてもらえる時期。今のうちに先輩の動きを見て、疑問があれば聞いて、たくさん間違えてアドバイスをもらってほしい。そのアドバイスや経験は必ず自分の糧になります。

支援はチームで行うもの。相談してほしい。

自分の介護・支援に自信が持てなかったとき、些細なことも相談をしていました。具体的な対応を教えてくれるし、自分の心にも余裕ができます。先輩に相談することは気が引けてしまうこともありますが、先輩も新任職員が何に悩み、困っているかを知り力になりたいと思っています。また、相談することで職場にコミュニケーションが生まれます。福祉の仕事はひとりではなくチームで行うものです。一人の力ではどうしようもないこともチームで行うことで違った角度からの視点が持てます。

新しい発想や提案をしてほしい。

福祉の業界では福祉に染まるということばを聞いたことがあります。これは当たり前と思わず、新しい発想や提案をしてほしいです。先輩も気付かないことがあります。疑問に思ったことは先輩に言ってください。そうすると、利用者の方の新しい顔を発見したり気付いたり、もっと良い支援につながると思います。皆さんにはたくさんの意見を言ってほしいです。



新任職員からの初心の志メッセージ

大学時代に介護・福祉の仕事に出会い、人の相談や生活支援をしたいという志をもって入職しました。仕事への期待や不安がありますが、利用者を第一に考え、寄り添い、思いやりのある介護のスペシャリストになれるよう、責任をもってがんばります。

昔からの夢だった保育士になることができました。実際の仕事は、自分が思っていたように子どもと関わらず、仕事を覚えることに苦戦したり、いまはまだ、頼りない保育士だと実感しています。分からないことを分からないままにせず、自分から先輩方に相談し、指導を受けて、理想とする保育士に近づき、子どもに愛され、夢を与えられるような保育士になりたいです。



Voice — 受講者の声 —

記念講演を聞いて

- 福祉の仕事は人と人のつながりを無くしては出来ない仕事であることを改めて理解しました。相手を見ること、寄り添うこと、が大切でありそこには愛がある(愛なしではできない)ことが、時代を超えてもなくなる福祉の魅力であると考えました。
- 人を支える、大切にすることは言葉では簡単なことだが、いざ実践すると自分にとって良かれと思ってやっていることが相手にとっては、不快に感じていることもあり、相手に寄り添うことはとても難しく客観的に見るのがいかに難しく大変なことなのか改めて知ることができました。利用者の方に寄り添えるようにしたい。

先輩からのメッセージを聞いて

- 利用者さんとのコミュニケーションの取り方、職場での先輩に対して意見をして新しい風を入れて欲しいと言うことや長く働いているといろいろなことが分かるようになり喜びに変わるという話が聞け、良い時間になりました。
- 知識をきちんと得ること、当たり前と思わずチームでより良い支援が出来るよう意見を出し合うことは特に実践したい。

記念講演

社会福祉法人横須賀基督教社会館 会長 阿部志郎氏

Fear not to sow because of birds.

—たとえ鳥がついばんでも、種をまくことを恐れるな—

阿部 志郎

1926年生まれ。明治学院大学助教授を経て、1957(昭和32)年より横須賀基督教社会館館長に就任、2007(平成19)年より会長。
神奈川県立保健福祉大学名誉学長。



大局をみる目と知性・感性を養う

まず、社会福祉に携わる者は、「大局」を見ることが大切です。そして、知性や感性を培っていくことが求められます。

日本の福祉の先達者の中に石井十次がいます。明治39年に東北が大凶作になって、2万人と推定される子どもが捨てられた。その中から825人の子どもを岡山へ連れて帰った岡山孤児院というのは、石井が創設し、1200人の子どもを養育し、世界で4番に大きな“孤児院”になりました。石井は東北の孤児の話聞いて、理事会を開き、借金をする許可を得て、新しい保母を雇いました。また、鉄道会社に行き、子どもを運ぶための運賃を無料にしろと。825人の子どもを3班に分け汽車に乗せました。岡山まで止まる駅ごとに、各方面に協力をあおぎ、仏教やキリスト教の関係者、その他さまざまな人たちが差し入れをしています。さらに、その子どもたちのために賛助会費を募り、1万人からの賛助会費を集めました。ただ神に祈るのではなく、実に合理的、経済的、知性にあふれた人と分かりました。

当時、孤児が出てきた源は、自然災害、凶作、戦争と考えられていましたが、石井は、社会を考え、大都市のスラムに源があると考えていました。そのため大阪のスラムに事業を興すことをした人でもありました。それは、大局を見る目を失わずに知性をつかうということです。

大局を見るためにはどうするかというと、能の役者が「舞台上で一生懸命踊るとき、心は観衆の距離に置きなさい」と、世阿弥が言いました。つまり、自分のことを客観的に見なさいと、離れろという意味です。

一方、アイデンティティというのは、「自分に近寄りなさい」ということです。離れろと矛盾します。

アイデンティティとして相手の立場に近づきながら、なお客観的に相手を見る目をどうやって併せて持つか。この矛盾を、自分の中で内的に統合していく。

それが福祉に携わる者の生涯かけての課題です。

海軍の軍医総監の高木兼寛は東京慈恵医科大学をつくり、看護教育を最初に始めた人です。高木は「病気を診ずして病人を診よ」と言いました。症状だけを捉えず、それで苦しみ、悩んでいる患者を診なさいと。

その人には、家族、職業、社会関係がある。人間全体を捉えなさい、という教えです。

アジアで初のノーベル文学賞を受けたインドのタゴールという詩人がいます。タゴールは、「全ての子どもは神が人間に失望していないことを伝える使者だ」と言いました。人格の尊厳を子どもに認める意味です。子どもたちに、氷が解けたらどうなるかと聞くと、子どもの中には「春が来る」と答えます。正解ではないが、夢がある。これが感性です。こういう知性や感性はこれから生涯かけて自分の中に培っていかねばなりません。

Commemorative lecture

価値観の変化の中で仕事をする

第2次世界大戦が終わって約10年間は、日本はとても貧しい生活でした。食べるものにも不自由しました。こういう時代を過ぎて経済が成長を始めました。人間が生きていくために、人より物、お金が大事だという価値観に変化してきました。

そしていつの間にかそれが豊かさ故に享楽化し、生活が段々と崩れてきました。その時代の問題を暗喩する出来事がありました。中学生が学校に弁当を持ってきたとき箸を忘れたため教師が「箸を持ってきなさい」というと、生徒は箸を使わずに弁当にかぶりつき犬のように食べるという現象が、いくつかの中学校で広がりました。パンというのは生きる手段ですが、その手段だけのパンが目的化してしまいました。食べることが目的化するということは、生きる意味を失うということです。

経済が豊かになるにつれて失ったものがあります。その表れの一つとして「鎮守の森」があります。神奈川県には鎮守の森が2850ありました。40年前の調査では、鎮守の森の規格に合うのは41しか見当たりませんでした。今はいくつあるのか分かりません。鎮守の森、それは無駄な空間です。何の収益も生まない。そこで鎮守の森を無くし、工場を建て、住宅に変え、収益を得るようにした。しかし、私は何か失っているものがあるのではないかという気持ちを持っています。時代は変化しています。皆さんはこういう時代の変化の流れの中で、仕事をするようになります。

愛するからケアをする～ともに心を豊かに

時代の流れとともに、福祉の世界でも、機械化が進むでしょう。しかし福祉にとって機械というのは、あくまでも補助手段です。機械の導入で、人間がしなければならないことに集中することだと覚えてほしいのです。

なぜかという、「ケア」をすることが、仕事だからです。ケアという言葉の意味は、愛ということです。なぜケアをするか、福祉に携わるのか。答えは、愛するからです。愛というのは、人と人の間に生ずるのです。その愛をいかに育てていくか。

ホスピスを最初に始めたシシリー・ソンドースという人がいます。患者が苦しみ死んでいくのをどうすることもできない中で、「ホスピスでできることはただ一つ、寄り添うこと。患者と共にいることである」と、愛というのは寄り添いであります。

アメリカの病院に行くと、PCUと書いてあります。英語でパリアティブ・ケア・ユニット。パリアティブというのは、がんの痛み、内臓の痛みを緩和する、和らげるという意味です。パリアティブの原理は、着ている上着を脱いで、病んで苦しんでいる病人に掛ける。病人はそれで寒さをしのぐ。上着を脱いだ自分が寒くなる。それを承知の上で、あえて上着をかける。それは上着をかけられた人と、上着を脱いだ自分が共に心を豊かにされるからです。これがケアであり、自分と相手が共に成長するのです。

困難に耐える、一人ひとりに光をみる

時代が急速に変わることで、システムが大きく揺らいでいます。そのシステム、法律、規則、制度、政策は時代と共に動きつづけます。そうすると、私たちはそれに巻き込まれるのです。波の上をあちこちに流される。それはつらいことです。

「上司に叱られる」「同僚と歩調が合わない」「利用者から暴言を吐かれる」「こんな苦しいのはもう辞めたい」、恐らくそう思うことがこれからも多くあるでしょう。苦しくて続けていられない。それを耐える力を、ネガティブ・ケイパビリティといいます。ネガティブは否定的、消極的です。苦しく、つらいですが、その否定的なものにしっかりと耐える。福祉の仕事をする者にとって必須の条件です。

これをいかに耐えるか。一つは目的意識を持つこと。何のために自分は働くのか。相手に対して何をしたらいいのか。自分の目標は一体何か。それを自分に問い続けるのです。

もう一つ。私には30歳代後半になる障がいのある友人がいます。友人が4歳のときからの付き合いになります。

Commemorative lecture

この友人が、成人式に呼ばれました。当時1200人の青年が市民会館に集まり、会場内は荒れていました。式ではオーケストラの演奏があり、1分間だけ指揮をする人が抽選で当たる。その友人が当たりました。オーケストラのいる演台まで、身体が不自由ですから、その歩いていく様子を見て、みんな“あざ笑い”ました。しかし、友人は家にいるとき、毎日一人でクラシックを聞き、誰よりもクラシックに詳しい。音楽家のお母さんでもかなわないほどです。指揮台に立ち、1分間、見事に指揮をしました。1200人の嘲笑した青年たちは、彼が指揮台に立ったとき静まり、降りてきたら拍手喝采。荒れた青年たちに話を聞かせる力を誰も持っていませんでしたが、その友人は、青年たちの目を一斉に向けさせたのです。彼は、彼でなければできないこと、彼でなければ発せない光を発しています。その光を、私たちは見るができるのです。

障がいがあるうと、誰であろうと、内なる光を持っています。その光を見いださなければいけません。その光に照らされることによって、自分自身も光を発することができるのです。これは、まさに人格の尊厳です。

福祉の文化をつくる一人になる

“ボランティア”は、幸いにしてだんだん増えてきました。阪神・淡路大震災では137万人、どこからともなく全国から人が集まりボランティア活動をしました。この年はボランティア元年と言われています。現実はどうでしょう。市民、地域の人々への調査によると、成人の7割がボランティアに関心があり、機会があればやりたいと答えています。しかし、実際にボランティアをしている人は10人に1人もいない。関心がありながらボランティア活動に参加しない。理由は、誘われれば、頼まれれば、義理があればとなっている。市民が待ちの姿勢、受け身となっており、これを能動的な姿勢に変えていく、これが市民文化の課題です。

福祉が大きく変わりましたのは、社会福祉基礎構造

改革によって、社会福祉事業を生み出したことです。

その法律には、七つのアジェンダがあります。その中に、「福祉の文化」の形成と書いてあります。ここにあるのは福祉文化ではなく、「福祉の文化」。文化の根底に福祉を置かなければならない。福祉を基盤にした文化をつくることを意味します。これからの福祉は、新しい市民文化をつくるのです。

市民参加によって、福祉施設も支えられています。私どもはどうしても守りの姿勢でした。守るということは、地域と疎遠になることです。でもこれからは、地域に出て、皆さんも一緒にその地域づくりに参加をして市民文化をつくっていく、そういう姿勢がこれから望まれるのだと思います。

ヘレン・ケラーという女性がいました。目が見えず、耳が聞こえず、口がきけませんでした。ヘレン・ケラーは「月を見て未来の夢を描けぬ人は、惨めで不幸だ」と言いました。ヘレン・ケラーは月を見たことがない。でも心の中で月を見て、未来の夢を見た。私どもに必要なのは下を向くのではなしに、上を仰ぐ。月を見る。そしてそこから夢を、ビジョンを描く。まさに必要なのはビジョンです。そのビジョンを追っていく。これからそういう生活を、ぜひ送ってほしいと思います。

Fear not to sow because of birds. という標語があります。Fear not、恐れるな。to sow、種をまけ。because of birds、たとえ鳥がついばんでも。種をまいて、鳥がついばむかもしれない。でも種をまき、まき続けなさい。種をまくことを恐れるな、と。

これから皆さん、日々、時には無駄な努力に見えても種をまき続ければ、まき続けるだけのビジョンを描いてほしいと思います。

私は現場で50年働きました。嫌なこと、つらいこと、泣きたいこと、うれしいこと、いろいろ経験をしました。しかし、つらいことは忘れました。

**50年の現場生活を一言で言うならば、
「楽しかった」。**